

北海道師範塾 塾頭通信

「教師の道」

第928号 平成27年5月12日

命の重さを学ぶ

千葉県^{やちまた}八街市の八街少年院では、矯正教育として、入所中の少年が捨て犬をしつけ訓練するプログラムが行われており、一定の成果が表れているようです（3月21日付読売新聞から）。

新聞報道によると、八街少年院では強盗や傷害などの犯罪をした17歳から20歳の男子50人余りが生活しています。

そして、この少年院では、昨年7月から、「殺処分される捨て犬を訓練し、家庭に戻すことを通じて命を大切に作る心や忍耐力を養う」事を狙いとしたプログラムが導入されています。

具体的には、少年1人が犬1匹を担当し約3か月間かけて平日の数時間、少年院で犬のしつけ訓練をするというもので、全国で初の試みとの事です。

また、週末になると地域のボランティアの家庭が犬を預かっているのですが、それだけではなく、ボランティアの家庭と少年との間で手紙での交流も持たれているようで、こうした取り組みも少年達の矯正にとっては大きな力になると思います。

なお、訓練を終えた犬は、希望する家庭に譲渡される事になっています。

このプログラムは、少年院に入所している少年達の更生だけではなく、本来であれば殺処分されたであろう犬達にも新たな命を与える事に繋がっています。

我が家の愛犬（名前は太郎といいます）を見ていると、「こいつはなんてジコチュウなんだ」と思う事がしばしばです。家内が呼ぶと尻尾を振って寄って行くのに、私が呼んでも知らんぷりしていますし、私が新聞を読んだりテレビを見ていると、「俺と遊べ」といわんばかりにボールを啜えて来て、私に押し付けます。無視なんかしていると大変で、私の耳元でワンワン吠えるので、仕方なしにキャッチボールに付き合う事になります。

それでいて、こちらから遊んでやろうとしても、その気がないときはそっぽを向いています。事程さように、動物との付き合いは難しいものですが、恐らく、犬のしつけ訓練をしている少年達には、思い通りにならない事に戸惑ったり、いらだいたりする事も多いのではないかと思います。しかし、訓練を重ねる中で、犬との信頼関係が出来、犬も次第に少年達のいう事を理解していくようです。

少年院に入所している少年達の多くは、様々な事情から自尊感情が育っていません、

壁にぶつかる度に「どうせ自分は…」と投げやりになったり、社会に背を向けて現実逃避したり、また、旨く行かない事を誰かのせいにし、暴力で解決しようとして来たのではないかと思われます。

こうした少年達が、犬と付き合う事で、思い通りにならない場合でも自分が我慢する事を覚え、また、責任感も芽生えているようです。何故なら、ちゃんとしつけが出来なければ新しい飼い主も見つからず、新しい飼い主が現われなければ殺処分が待っているのですから。

そして、何より少年達の心に影響を与えたのは、犬と真剣に向き合う事で芽生えた「信頼感」であり、「命の大切さ」に対する実感ではないかと思ひます。

少年の一人は、「犬を捨てた飼い主の身勝手さに腹が立つ一方、自分も身勝手な行動をして多くの人を傷付けたと気づいた。」といひます。そして、「殺処分される命を助ける事が出来、初めて誰かの役に立てた」と語っています（3月21日付読売新聞から）。

少年達が、自己を振り返り、人として生きて行く上で何が大切か、どう行動すべきかを学ぶ事は重要な事ですが、同時に、自分にも誰かの役に立てるといふ実感を持つ事は、非行少年の矯正にとっては極めて大きな力となるでしょう。

全国には、52カ所の少年院がありますが、少年達の矯正教育の効果をより高めるためにも、また、殺処分されている多くの犬達の命を救うためにも、出来るだけ多くの少年院において同様のプログラムが実施される事を望みます。

（塾頭：吉田 洋一）